

「回天の道」四つの旅

清河八郎の足跡 観光活用へ

庄内町清川出身の幕末の志士、清河八郎が江戸を目指した「回天の道」を観光に生かそうと、関係市町などが連携して本年度、足跡をたどるツアーを計画している。約150キロの県内ルートを四つに分け、それぞれ1泊2日程度の旅を提案する構想。第1弾として26、27の両日、庄内町と鶴岡市にまたがる山伏峠などを散策する。

県内関係市町や団体が連携

清河八郎は1847（弘化4）年、満16歳で学者を志して家出し、江戸へ向かった。東京のNPO法人「元氣・まちネット」（矢口正武代表・戸沢村出身）は藤沢周平の小説「回天の門」を手掛かりに、出奔した際の県内ルートを「回天の道」と名付けて2009～10年に踏査した。

庄内、鶴岡、西川、寒河江、山形、上山など関係市町や地域づくり団体のメンバーが、「回天の道」を生かした広域観光について協議。本年度は八郎が歩いた庄内町から上市市までを4区間に分け、それぞれツアーを催すことにした。第1弾は「清河八郎 回天の道・文学散歩の旅」として26、27日に行う。初日

26、27日 山伏峠(庄内町一)散策から

は庄内町清川の清河八郎記念館に集合し、同町肝煎から山伏峠を経て鶴岡市漆川に至るルートを歩く。この峠道は10年6月に地元住民らが復元整備し、昨年もツアーを実施した。この後、玉泉寺を訪れ、湯田川温泉に宿泊。2日目は八郎や藤沢周平と縁が深い同温泉を散策する。オプションとして藤沢周平記念館の見学などもある。日帰りコースも選べる。問い合わせは矢口代表090(5494)8699。

第2弾以降は未定だが、それぞれ歩く要素を織り込んだ1泊2日の旅を基本とし、六十里越街道や各地の歴史、文化、自然といった観光資源を組み合わせて魅力的な旅を提案する。